広島市郷土資料館
学習の手引第12号

# 下駄づくり

下駄は，靴が普及する以前，草履とともにわが国の中心的な履物であった。下駄は，道路が舗装（ほそう）されていない時代，歯があるだけに足が汚れにくいし，欧米と違って家の中では履物を脱ぐ生活形態からも着脱しやすい便利な履物であった。靴が普及し始めてからも，「下駄ばきで」とか「下駄をつっかけて」というように，日常の気軽な普段履きとして最近まで使用されてきた。しかし，最近の若者の足にはなじまないようで，「下駄をはかせる」「下駄をあずける」といった言葉もしだいに聞かれなくなった。

## 1　下駄の歴史

わが国での下駄の始まりについては十分明らかにされていない。古墳の副葬品の中に下駄の石製模造品が見られることから，古墳時代にはすでに今日のような下駄が存在していたと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡からも木製の下駄が多数出土している。また，清少納言の『枕草子』には足駄を履いた童（わらわ）の記述があり，絵巻物にも下駄履きの人物が数多く登場するので，下駄もかなり広まっていたようである。

江戸時代の下駄づくり

『和国諸職絵尽』（柏書房刊『日本風俗絵図２』より）

江戸時代になると下駄の種類も豊富になり，高級品も作られるようになった。また，町人などの異様な風俗を取り締まるものとして，寛延３年（1750）年に塗（ぬり）下駄などの使用を禁止する御触が出されているが，あまり効果は上がらなかったようである。

明治の文明開化で靴が履かれるようになっても，下駄はまだまだ多くの人々の生活の中にあった。下駄が急速に姿を消すのは洋服が定着し，サンダルが普及する戦後のことである。

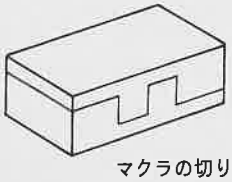
下駄を取り扱う店（『広島諸商仕入買物案内記』明治16年刊　小谷進氏蔵）

## 2　広島における下駄づくり

広島地方における下駄づくりは，落合（現安佐北区）周辺で盛んに行われていた。落合での下駄づくりは，元和８年（1622）に諸木（もろき）村吉備津屋清四郎が備中板倉（現岡山市）で技術を習得して帰り下駄を作り始めたと伝えられる。その後，農閑期の余業として周辺の村々にも広まり，広島城下に近いことや太田川上流域からの安定した材料供給などを背景に盛んに作られるようになっていった。藩府は文化９年（1812）玖（く）村に山方役所の出張所を設けて材料の供給を行い生産の助成をはかるとともに，翌年には城下に株下駄屋48軒を定め，製品のすべてを統制下に置いた。明治中期以降，県東部の松永で雑木（ぞうき）下駄の生産が増加すると，これと競合しない桐（きり）下駄の生産に転換していった。明治末期から大正にかけて生産のピークを迎えたが，昭和になると急速に衰退していった。

## 3　下駄づくりの工程

下駄は台（テン）と歯（ハマ）が一体となった連歯（れんし）下駄と台に歯を差し込む差歯（さしば）下駄に大別される。連歯下駄にもいろいろな形態のものが工夫された。



マクラの切り離し

**連歯下駄の手作りの工程**

(1)　荒木取り

原木からマクラを取り，乾燥させる

(2)　仕上げ

①　マクラを歯が向き合った形に切り離す

②　木目が同じようなものを対（つい）にし，不要な部分を切り落とす

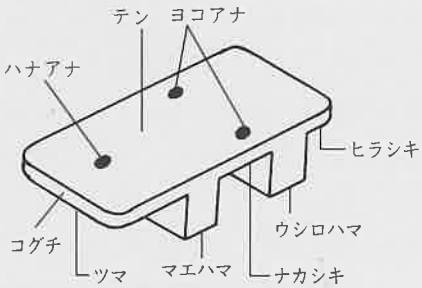
③　台の形を整え，ハナオの穴をあける

④　左右の歯の高さをそろえる

⑤　細部を仕上げ，磨きをかける

⑥　ハナオは問屋や小売店でつける

**各部の名称**



男性用下駄

塗　下　駄

コッポリ